

掲載日 2019 年（平成 31 年） 1 月 1 日火曜日

宮古島を「健康アイランド」に

麻痺から”奇跡”の回復

宮古島あゆみの会

堀尾憲市さんリハビリ指導

脳卒中などにより身体に麻痺がある人が再び従来の身体機能を取り戻せるよう支援を行う「宮古島あゆみの会」（堀尾憲市代表）。現代の医学では治療が困難とされる病状に対して自己治癒力を用いて機能を回復させる取り組みを行っている。伊良部の東地区構造改善センターで行われている同会には毎日リハビリを行う人たちが足を運んでいる。宮古島を「健康アイランド」として日本における脳卒中の治療拠点にすることを目指している堀尾代表は「諦めている人たちに治ることを伝えたい」と語った。



65 歳の時、脳梗塞で倒れ入院した堀尾さんは、病院では身体機能を回復させることが難しいと言われ、独自のリハビリを開始。25 日間で体の不自由がなくなり退院し堀尾さんに関係した医療関係者を驚かせたという。その後自身の体験をもとに脳卒中やパーキンソン病、多系統萎縮症など身体に麻痺が起こり現代の医学では治療が困難とされる病状に対して自己治癒力を用いて機能を回復させる支援を無料で行っている。

支援は堀尾さんが施術などを施すのではなく、「脳の訓練」として体を動かすためのコツや訓練の仕方などを助言する。堀尾さんは「脳卒中などになると脳の神経の一部が死に機能のプログラムが失われる。一方、脳の運動野と呼ばれる部分が壊れると他の部分が 2～3 週間で補完し始める。一度獲得した機能を失うと再建するのは大変だが不可能ではない。人間は通常脳の 5 %程度しか使っておらず 95%は予備。予備を使いこなせば機能を回復できる」と説明する。

堀尾さんは「痙縮除去器具」と名付けた装具も開発。指などが握りこまれた状態で固まることを防ぐ。必要な人には靴底の外側を厚くして重心を内側にするすることで「安心して歩ける」ように工夫している。一方、病院などでつける装具を「ギブス」と呼び、痙縮を固定化するものとしてなるべく使用しないように指導している。

全国から講演の依頼を受け飛び回っている堀尾さんは独自の理論をまとめ「奇跡の復活」「麻痺は治る」（いずれも中部日本教育文化会から出版）の 2 冊の本を出版。当事者が読みやすいよう工夫が凝らされているのが特徴だ。「麻痺のある人は座って本を読むと姿勢の維持や本を待ち続けることですぐに疲れてしまうため寝ていても立てて読めるようにハードカバーにした。文字も大きいので読み飛ばすこともない」と説明した。

同会は毎週水～日曜日の午前 10 時～午後 2 時に伊良部の東地区構造改善センターで活動を実施。問い合わせ先は堀尾さん（090・3309-2352）

「希望持てた」声続々と-参加者たち-
苦しい訓練支え合う

「宮古島あゆみの会に参加する人たちの表情は明るい。参加者たちはあゆみの会に来て「希望が持てた」と口をそろえる。参加者は島内からだけでなく、島外、県外からもいるという。参加者にあゆみの会について聞いた。

2011年5月にくも膜下出血手で倒れたという平良妙子さん（70）は知り合いの紹介で17年3月から通い始めた。現在は支えがあれば歩ける状態で、家の中では杖を使って移動している「目に見える変化は少ないが時間をかけるとしっかり立ったり歩いたりできるようになるなど改善していることがわかる。思ったように体が動かせず重みがあるのは苦痛だが歩きたいという思いでやっている」と話す平良さんは「堀尾さんの本を読んで『治るんだ』と希望が湧いてきた。装具（指の痙縮除去装置）をつけて動かし始めたら握りこんでいた指が開くようになってきて嬉しかった」と笑顔で語った。

右半身に重度の麻痺を抱える松堂美代さん（68）は脳出血で倒れてから11年経つが、医師からは「一生歩くことはできない」と言われ希望を失っていた。18年5月から通い始め、堀尾さんに出会って希望が湧いてきた。リハビリは「堀尾先生が何かするわけではない。脳の構造など分かりやすく説明してくれ、理論的に言葉で脳に指令を与える方法を教えてくれる。（動かしたい身体の部分に）神経がつながっていないから何度も指令を出して動くようにしていく。家で独りではなかなかできないが、ここ（あゆみの会）では人と話しながら取り組めるのがよい」と強調した。松堂さんは1日4時間「痙縮除去装置」をつけてリハビリを行っているという。

那覇の病院で半年ほど入院して18年3月に宮古島に帰ってきたという50代の男性は高血圧が原因で脳出血を起こした。男性は「命が助かっただけでも良かったと言われるが麻痺が残るのは苦しい。これで一生を終えるのは嫌だがリハビリも苦しい」と苦痛を表現。一方「先生も経験者で回復しているので希望が持てるようになった。ここでは情報交換できるのも良い。病気についても理解するようになった」と参加の意義を語った。そして「脳卒中になっても復帰できる社会が作れば最高」と今後の会の活動に期待を寄せた。